

小学校と幼稚園

伊東金造

わたしが区立の小学校長で同じく区立の幼稚園長を兼任しているためか、「小学校と幼稚園」について何か書けとのこと、さして書けと言われると何も書けなくなる。時節柄、評価の問題、進学指導の問題、教育計画の問題など取り上げるとおもしろいかもしれないが、気楽に思いつくまま「小学校と比較した幼稚園教育運営上の諸問題」ということにして、幾つかの話題をこたつの中で考えてみることにしよう。但し以下はわたしの殻の中のことで、公立幼稚園の一般的傾向を主とするということをお前以ておことわりしておかなければならない。

一、普及度、幼稚園差、国庫負担

最初にだれでも考えるであろう「義務教育であるかないとの相違からの現実の問題」にふれてみる。これについてもさまざまの問題があるが、ここでは幼稚園教育の普及度、幼稚園差、国庫補助の三点を取り上げてみる。

普及度については日本の小学校は、熊の出る北海道の山の中でも、内海の小豆島はもちろんはるか南方海上の八丈島でも、ちゃんどある。就学年令の子どもは全国殆ど残りなく教育を受けている。この点日本は世界のトップクラスである。ところが小学校と誕生年がそんなにも違わない日本の幼稚園は栄養不良か愛情不足か育ちが悪く、同じ義務教育ではない高等学校に比べても劣っている。幼稚園が少し日の目を見て伸び始めたのはここ七、八年のことである。でも現在公私立合わせて就学前五歳児の幼稚園児は二十八%ほどで保育園を合わせても四十%ほどになった。これでは世界の英米仏はもちろん西ドイツにも劣っているわけで小学校とは比較にならない。また公立幼稚園数が私立幼稚園数の三十%というのも日本の特別の姿であるようだ。

普及度で特に注目すべきものに地方差のひどいことがある。公立幼稚園合わせて八百以上の東京を始め兵庫大阪静岡神奈川愛知岡山香川徳島京都広島などのように普及しているところもあるが、幼

稚園が県全体で十五、十六、三十一という鳥取、高知、山梨などもある。徳島県のように小学校に近い数の公立幼稚園のあるところもあれば、国立の無い県、公立の一つ、二つというところもあり、県全体で国立・公立合せて十以下というところが十三県もある。このように小学校に比べて幼稚園の普及率も低く、地方差のひどい現状を見ると、イギリスでは五歳児は義務制になっていることなど考え、今後一日も早く日本のあまねく幼児が就学前教育の受けられることを祈らずにはいられない。幼稚園教育普及のため、幼児を持つ両親をはじめ、お役人さん議員さんたちの特別の御尽力を期待したい。小中学校高等学校の次でもいっからお願いしたいものである。

次は幼稚園差である。ここでいう幼稚園差とはA県のa幼稚園とB県のb幼稚園との実体の差というようなことである。もちろん小学校にも小学校差は相当あるが、幼稚園ほどひどくはないようだ。わたしたちの調べたものを見て幼稚園の一組の人数が最高五十九人、最低五人（昭和三十五年度）とある。ちょっと驚ろく。すばらしく設備の整った幼稚園、充実した教員を揃えている幼稚園もあれば、部屋だけで机・腰掛けの足りないところ、高校出たての先生のところもあるといった相違が小学校よりひどいことである。せっかく幼稚園設置基準も定められていることだし、高い水準に下の方が引き上げられることを期待したい。

つぎは国庫補助に係る問題について考えてみよう。小学校は義務教育であるが故に教員給の半額を始め他の国庫負担は強力である。教科書無償配給さえ問題になっている。ところが幼稚園は義務教育でないことから、国庫負担額は小学校の爪のあかほどであ

る。だから幼稚園は設置者負担、受益者負担となり、入園料・保育料・給食費・PTA会費などと保護者の経済的負担が大きくなる。どうも日本では昔から幼稚園というところは、特別に富裕な家庭のこども”の入園するところというような見方が抜けて幼稚園教育の発展をさまたげているようだ。議員さんやお役人さんにそう考える方が割合に多く、また親もそう考える人がある。実情はいろいろあるが幼稚園教育のたて前は小学校と同じく幼児の全部を教育するというものでなくてはならない。最近の公立幼稚園はだんだんそうなっている。しかしながら現在は幼稚園入園児が全国的にみて低率なのでまた地方差がひどいので、国も県も教育委員会もお役人さんではなく国庫負担、県費負担或いは多額の設置者負担と踏み切れないが、今後就学前五歳児の幼稚園就学率が、六〇%を越したら国も県も教育委員会も本腰を入れて予算を増してくるであろうし、父兄の経済的負担も著しく軽減されるものと思われる。そうなるにはまず幼稚園の普及である。でも私たちはそれを気長く待つてばかりはいられないのである。国や県の負担を議員さんたちが特別努力してくだされれば、父兄の経済的負担も減る、負担が減れば就学率がグンと増す、という政治的な施策を望むのである。幼稚園に小学校並の国庫負担が実現したら、幼稚園の教員の待遇もよくなり（今は全国的にみてひどいものである）したがって良い教員が幼稚園にも集まる。施設設備も整って、給食で子どもの身体もしっかりし、教育効果も平均して高まり、父兄の経済的負担も少なくなるので、争って幼稚園に入園させ、幼児の就園率は急増する。簡単に言えば小学校並に近づくとおそれ、幼児のため、日本の将来のため早くそう

なつてほしいのである。

義務教育であるとはいへば、普及度、幼稚園差がこんなに小学校と幼稚園の相違を示しているが、たとえ義務制にならなくても国庫負担がある程度増すことによつてこれほどひどい違いはなくなることもわかつたわけである。やはり先だつものは何とかである。

二、教師と母親

幼稚園は小学校並に近い国庫等の補助がほしいと少しぐちつっぽい話になつてしまつたが、今度は幼稚園の組織・運営の方面で問題を拾つて肩のこりをほぐしたい。話題は施設、ことも、指導計画などもあるが、ここでは教師と保護者、特に母親について考えてみよう。

まず教師であるが、幼稚園の先生と小学校の先生を比べてどう違うかはちょっとわからない。でも何かありそうである。直感的にもあああれは小学校の女の先生とわかることがある。幼稚園の女の先生はわからないかな。さて観点が幼稚園の組織、運営上からであるから、それならある。男女構成が違う。小学校は大体男女数半半というところが一般であるが、幼稚園は絶対的に女の先生である。全国の調査で見ても男の担任は十指はないであろう。年齢構成から見ると幼稚園の先生が若い。わたしの小学校職員三十名のうち二十代は一人、幼稚園は七人のうち五人が二十代といったわけである。というのは同じ女の先生でも幼稚園の先生の方が早く結婚退職するようだ。これにはいろいろ原因もあるようだが、待遇や気風も考えられる。しかしこれは一般論で、幼稚園の女先生でも六十歳を越し

た方が無いわけではない。人ざわりは、小学校の先生はこわいが、幼稚園の先生はやさしい細かいところまでよく世話がゆきとどく。(と子どもがいう)でも最近はやさしい幼稚園の先生でも割り切つた下

ライ型も増してきたようである。園長も幼稚園の先生であるわけだが、園長は兼任が多い(公立八三%)ためか男が多い。でも同じ男が小学校の校長室ではこわいが、幼稚園ではやさしい。(と子どもや子どもの母親、先生がいう)これも小さなかわいい子どもがそうさせるのかもしれない。専任園長はやはり女が多い。

先生の勤務ぶりはどうだろう。よく町の人や父兄が幼稚園の先生は子どもが早く帰るから暇だろうなどと考える人もいるが、それはとんでもないことである。一軒をはっていると仕事の量はそう変わらないのに、先生の人数が少ないので、かえつて小学校の先生より多いかもしれない。(昭和三十五年度全国平均一園の教員数が三・一人)幼稚園の先生は仕事は細かくていいのである。多少非能率的なところも見受けるが。研究や研修の面でも最近はやさしい小学校の先生に劣らないようだ。なかなか熱心に研究もしているし、特にねばりが強い。時々幼稚園の先生がたの研究会に出てみるが、始めは発言が少ないが、だんだん発言も多くなり、終り頃ははいよいよ熱があがつて終り時間が延びることがよくある。だから研究会は終りまで決して席があかない。小学校の先生はそうはいかないようだ。父兄などとの連絡も幼稚園の先生は密で、父兄の信頼や接渉も小学校の先生より深いようである。何もわからない小さい子どもの教育を担当するので当然かもしれない。

指導の技術や能力については、小学校の先生は教科指導的で、幼

稚園の先生は生活指導的な傾向が見られる。その逆を言えば、小学校の先生は生活指導方面に手が廻り兼ねるが幼稚園の先生はここを言うところの指導の突っ込みが不足するきらいがあるようだ。その例は幼稚園児が小学校に入學するとわかる。小学校の先生は、幼稚園から来た子どもは慣れすぎていておしゃべりでキチンとしないところだが、幼稚園の先生は小学校に行くときつぱく伸び伸びとしてつけた子どもをすぐコチコチにしてしまうと残念がる。これを加えて二で割ったらちょうどよいかもしれない。

幼稚園の先生は小学校の先生より待遇は全国的に見て非常に悪い。もちろん小学校の先生と同じところもあるが、ひどくわるいところが多い。以上述べたようなよい幼稚園の先生に気の毒である。

幼稚園の普及度、地方差、幼稚園差の大きいように先生の待遇差も大きい。教員給与表によらないで役場の吏員給与表によることも多く、中にはそんな条令もなく(五〇%)どんぶり堪空式に給与いくらかというところもあるらしい。だから同じ資格でありながら小学校の先生は毎年昇給するのに、幼稚園の先生はなかなか昇給しない。(六四%)学芸大学を卒業して何年かたつとずいぶん開きができてしまう。給与が高くなると助役さんより高くなるから、昇給ストップか、退職かとやられる先生もある。この幼稚園の先生の給与等の待遇は一日も早く小学校並になって、十分の教育効果を子どものために期待したい。園長の手当も付記しよう。兼任園長の月手当が、凡そビース何箇ぐらいなどはだれも信用しないだろうと思う。(最低八十円)専任園長でも小学校並の管理職手当八%をもらっているところは少ない。(管理職手当なし五五%)

さて子どもの母親についてみようと思うが紙数が無くなったので簡単にする。子どもがその子には変りはないが生長発達の段階にしたがって幼稚園児と小学校児童は非常に違うように、同じ母親でも幼稚園の母親と小学校の母親には違った気風もあるようだ。小学校は「落ちついたおかあさま型」幼稚園は「若い張り切ったママ型」と一般的に言えそうである。幼稚園の母親はすごく熱心でフアイトがあり仲よしグループも密になって正常にいけばまことに頼もしい。それは白紙の子どもに非常な期待と願望を持つことと、教育への協力、教育関係者―父母同士も含めて―への新入りの意欲などによるものであろうか。小学校に行くとき落ち付き、慣れ、あきらめ、適当などとなり、進學間近に幼稚園型に復帰する。しかし幼稚園の母親はママ型ばかりではない。何人かは「おばあちゃま型」もある。世の中のこととは何でも承知といったふうがあるが、とにかく小さい子ども―多くは末っ子―がかわいくて仕方がない。「このまま大きくならなければいいんだがネ。」ときえ言うほどである。こうした「おばあちゃま型」も「ママ型」連を指導調整していくには貴重な存在である。PTAや母の会での「おばあちゃま型」に適任者を得ないと難しくなったり分派ができることがある。幼稚園の主任先生はこうした母親や先生を良くリードしなければならぬのでその任は重い。小学校並に教頭とすべきであらう。

(中央区立久松幼稚園長)

* * * * *